

中世曹洞宗における本参資料研究序説(一)

飯塚大 展

はじめに

私は、日本における中世禅宗史の一端を垣間見るべく、禅籍抄物を研究の対象として選択したが、本よりそれが明らかになることによって、直接的に五山・林下(曹洞宗道元派下、臨済宗大徳寺派、妙心寺派等)の歴史的展開の解明や思想史研究に寄与し得ると思わない。私自身、所謂宗学的アプローチに終始している点には、内心忸怩たる思いはある。本稿が扱う資料は、極く限定された本参(門参・密参録)と言われるものが中心であり、構想としては林下曹洞宗道元派下の展開を軸に考察することを念頭においているが、実際には石屋派の抄物資料の紹介にとどまっている。また資料自体も必ずしも新出の物ではない。石屋派の円応寺所蔵資料を選んだ理由は、室町時代後半から江戸時代初頭にかけての、まとまった、しかも多様な禅籍抄物資料群である事と、関東を中心に展開した了庵派下の各派の本参との比較を今後の課題として設定しているからである。今後は同時に大徳寺派、妙心寺派、及び幻住派の本参資料との比較も行いたいと考えている。ちなみに大徳寺派及び幻住派の禅籍抄物については、私自身極めて不十分な論議であるが、若干考察したことがある。¹⁾

応仁・文明の乱以降、室町時代後半より江戸時代初頭にかけては、最も活発に曹洞宗各派が地方に展開した時期にあたる。それぞれの地方に展開した各派はやがて独自の宗風を確立し、それはとくに公案体系および公案解釈において顕著になってくるように思われる。地方に展開した各派は、その地方に最も早く進出し、外護者を得て建立された寺院を據点として、次々と本末関係を有する寺院を開創するという形で、一定の地域に根ざしていった。その派の據点寺院となった本寺は、しばしば輪住制という形をとり、派内で末寺関係にある主だった寺院の住持が本寺へと晋住し、一定期間住持を務めるといふ形で、本寺の權威化と経営的基盤を固めていった。かくして直接的な本末関係にある寺院間の門派意識、帰属意識が強固なものとなって行つたと思われる。しかし、その上部に位置するであろう永平寺、総持寺に対する帰属意識は相対的に稀薄であつたと思われる。勿論、形式的に自己の同一性を曹洞宗に求めることはあつたが、それは大枠で自己の正当性を述べる際に限定される。即ち、自らは臨済宗とは異なり、かつ五山の僧ではなく、曹洞宗に属し、道元の法孫であることの正統性を強く主張する場合がそれである。各派毎にこのような門派としての強い帰属意識が醸成された背景には、それぞれの派が独自の教法的裏づけを有していたことが一因として想定される。今後、私は地方的展開を果たした幾つかの門派を考察の対象として、その教法的背景を研究して行きたいと思う。本稿はその準備作業にあたるものである。

一 語録抄と本参

一般に洞門抄物の分類として用いられてるのは、石川力山氏の分類である。それに依れば、以下の通りである。²⁾

(一) 語録抄（聞書抄）——禅宗典籍類の注釈書で、原則的には講義提唱したものを聴講者がそのまま筆録したものを意味し、聞書抄とも呼ばれている。したがって、第一義的には仮名書き口語体の抄ということになり、洞門抄物の資料的特徴もこの点にあるが、抄を広い意味での注釈書とみるなら、若干の漢文抄もこれに含まれる。

(二) 代語(代・下語・著語) — 古則公案や機縁の語句、重要な詩句等に対して、中国以来の伝統的な方法である著語の形で語を付し、公案理解の一助に資したもので、時代が下ると仮名書きのものも出現する。形式としては、一則の公案を示し、搦語をもって学人に問いかけ、その答えがなければ、学人に代って師家が著語を下すという手順を取る。

(三) 代語抄・再吟 — 公案に対して下された代語(著語)について、その出典や字義等を詳しく評釈注釈したものであり再吟も同様の性格を持つものであるが、代語抄をさらに再吟味して注釈を付加した意と解される。

(四) 門参(本参・秘参・伝参・秘書) — 中世曹洞宗における公案禅盛行の実態を伝える資料で、入室参禅・公案参得の手引書で、洞門抄物中でも最も多量の伝本が現存する。参禅の室内における師家と学人の問答応酬の仕方や、公案解釈の方法を書き留めたもので、伽藍法の伝授とともに伝えられる。

(五) 切紙(断紙) — 嗣法三物に関する口伝や、葬送・供養などの諸儀礼、宗旨の秘訣、公案の要旨等を、一項目毎に一枚の紙に書きつけ、年記・伝授者・相承者を明記して秘密伝授したもの。

石川氏に依れば、(語録抄)の漢文抄が成立するのは洞門抄物の中では比較的早く、続いて、聞書抄(仮名抄)が成立するとされる。(語録抄)の代表的なものとしては川僧慧済の『人天眼目抄』が挙げられるが、そこには中世曹洞宗の叢林における生活の一面が読みとることが出来る。この点については、既に石川氏の論稿³⁾があり、私自身も別稿において考察しているのでここでは省略する。⁴⁾

次に聞書抄(仮名抄)とは、どのような注釈スタイルなのかを確認するために、駒澤大学図書館蔵『碧巖録抄』を一例として取りあげてみたい。

△垂示、乾坤窄、日月星辰一時黒。世界ノマツクラニカキ陰タル時、天地モセハクナルソ。カキ陰ルト思タレハ、果シテ、ハタノ神鳴渡テ、車軸ヲ流ス雨ガフツタソ。如此ノ棒喝ノ機用モ、向上ノ哀ニハ、當リ得ヌソ。マシテ、

三世諸佛歴代祖師モ、一大藏教、明眼衲僧モ、思モ依ラヌ莫ヨ。此時佛ト説、禪ト説モ、皆汚タソ。曲ノ物ヲハ曲タマトフケ、直ナル物ヲハ、直ナルマトフケ、這裡還テ有久參上士麼。代云、山僧好手。

第二 至道無難、唯嫌揀擇、纔有語言、是——白。諸人揀擇ヲ嫌ヘハ、明白裡エ走ル程ニ、趙州ハコトヲ示シタソ。兩頭三面ドチヲ本トセウスソ。明白裡ニ不在ト云テ、鼠穴ノ様ニ、小暗キ処ヘ行イタデワ無ソ。趙州ノ処ニ、途轍窠窟ハ無ソ。サテコソ、賊身ハ露タレ。不在明白裡、トコヘ去タソ。是汝護惜也無ト諸人ヲ見タソ。果ノ僧カ出、既ニ明裡ニ在。サラウニハ、什麼ト護惜セウスト、把テツメタソ。我亦不知、趙州ノミニ非ス、三世諸佛歴代祖師モ知ラヌソ。既ニ知ラサラウニワ、什麼トテ、明白裡ニ在ラストハ云タソ。僧ハ、トコマテモ把テツメタソ。師ハ、本ヨリ途轍カ無イ程ニ、問処カ、好一拶タソ。サテコソ、問レ莫即得リト、問処ヲ其促与ヘタソ。トコマテモ、趙州ハ、途轍カ無ソ。サテコソ、圓悟モ、這老賊ト云タレ。終ニ什麼ヲモ揀擇セヌソ。只ヲノナリナソ。批判一々途轍ニ落_レ処ヲ云タソ。絞釘膠粘、堪_レ作_レ何用。カスカイ着、膠着ケニハセヌソ。識ニ取鈎頭意、莫_レ認_レ定盤星ト云ハヌカ、轉身自在ト云ヌカ、横拈倒用、逆行順行、得大自在ト云ヌカ。問_レ莫即得、礼拜了退ト云意旨如何。代云、騎_レ賊馬趕賊_レ。頌云、至道無難、言端語端、本則ニワ、一カトスレハ、有多種、二カトスレハ、無兩般、日上レハ、月下リ、山深ケレハ、水寒シ。途轍カナケレハ、頭々是道、物々全真、嫌ウス物モ無ク、好ス物モナク、刹々塵々各其マ_レタソ。識情ヲ以テ揀擇スルニ依テ、善惡モ在ソ。サテコソ、觸體識尽喜何立。識情カ無ケレハ、逆行順行、横拈倒用、行往坐臥、枯木ノ童吟タソト、一ツ々コトハツタソ。末ニ到テ、難々ト、一関スエタソ。一関スエテ、揀擇明白、君自看ト、ツキハナシタソ。雪豆ハ、手ヲ着ヌソ。是□批判、一々説破セラレタ程、重説スルマテモナイソ。至道無難、与難々相去多少。代、這野狐精。（傍線は筆者）

本書は、その奥書に「于時天文四季六月一日 天甫拜」とあることから、天文四年（一五三五）に天甫によつて書写された『碧巖録抄』であり、川僧慧済の講義録ノートではないかとされるものである。傍線部が拶語と代語である

が、重要と思われる箇所において、確認と総括とがなされている。川僧の他の語録抄「人天眼目抄」「無門関抄」においても、講義のしめくりは、殆んどの場合抄語・代語によって結ばれている。

本参とは、これに対して、かなり簡略化された形式のものである。ここでは叡山文庫蔵の『碧巖休偈記』を取りあげてみたい。全体が師資の問答形式に依っていることに注目すべきであり、必ずしも詩句の一句もしくは二句という短評形式(著語)に限定されない、口語の和文による問答が展開されている。

第二、趙州至道無難。

師云、先ッ示衆ノ機ヲ。代、拈來與ニ天下人ニ看。師云、何ヲ拈シ來タソ。代、本分ヲ拈シ來テ走。師云、本文ヲ何レト拈シ來タソ。代、無力一物ヲ走。師云、至道無難ヲ。代、無孔ノ鉄槌抛ニ當面ニ。師云、其ノ句ノ說破ヲ。代、全把柄ハ走ヌ。師云、唯嫌揀擇ヲ。代、無孔ノ鉄槌重テ下レ擲ヲ著屑、クツロカヌト也。師云、纔有ニ語言ニ是揀択、是明白トヲセラレタヲ。代、本分ニ迷トモ悟トモ言フス道理ハ走ヌヲ、是明白ト云カ、迷悟ト作シ羊テ走。師云、ソコニ當テ句ヲ。代、甜者ハ甜苦者苦。師云、老僧不明白裡在ヲ、ト云機ヲ。代、有テ明白裏ニアラズト云カ、賊ヲ走。師云、句ヲ。代、良價深蔵ノ如雲虎ノ。師云、是汝還護惜ス也無、ト云機ヲ。代、坐底。師云、時ニ有僧問、既不_レ在ニ明白裏ニ、護惜箇什麼ヲ、ト云機ヲ。代、奪他鎗刀ニ倒刹人ヲ。師云、州云、我亦不知トヲセラレタ機ヲ。代、俊狗咬_レ人ヲ不_レ露_レ牙ヲ。師云、和尚既不_レ知、為ニ什麼ニ却道不_レ在ニ明白裏ニ、僧之機ヲ。三度曾施ニ陥虎機ヲトモ。代、穿ニ人鼻孔ヲ、換ニ人ノ眼睛ヲ。州云、問支即得、礼拜了退、トヲセラレタ機ヲ。代、三度施ニ陥虎機ヲ。示衆ノケテ僧ニ答話カ三度也。頌云、至道無難、言端語端。代云、本分ヲ至道無難弄スレハ、言端語端テ走。師云、一ニ有_レ多種、二ニ无_レ二兩般一。代、何ニモ本分ヲ分_レテ見ハ、二ニ无_レ二兩般、二ツハ走ヌ。師云、天際日上月下、欄前山深水寒ヲ。代、四時遷反ノ上アモ、見セシメテ走。師云、觸體識尽テ喜何ソ。〔 枯木裏龍吟、銷未_レ乾、ト當テ走。義理ハ 佛祖ノ智イン亦

ヨク濕氣ガ乾カスンハ、龍吟ハ出スマイソ。龍吟カヨク乾ク證拠ヨ。師云、難々、ト云タ機ヲ。代、此一大夏ハ、本分テモ大難、目前テモ大難ヲ走。師云、揀択明白自看ト云タ機ヲ。代、迷悟共ニヨク自知セヨト云キテ走。

叡山文庫には、まとまった洞門抄物資料が所蔵されており、その中には本参類も多く含まれている。⁶⁾『碧巖休岱記』は、その資料の一つであり、奥書には、「竜江院開山秀峰存岱書記、於紫野一休下参得之」と見え、大徳寺派下の一休宗純について参得したとする伝承を持つものである。洞済交流の観点から注目すべき資料であるが、その真偽を含めてその詮索はここでは行わない。

更に永昌院蔵の『一華派参禅 雲岫派本参』では、更に簡略化された形となっている。

△趙州至道无難。師云、不揀択道ヲ。代、急切ニ師ノ前ニ到テ道ヲ走ウ。師云、夫ハ何ントテ。代、至ル処皆道ヲ走。師云、其二句ヲ。代、山川无ニ隔越ニ、処々是光明。師云、光明ノ得羊ヲ。代、欲ハ得ニ現前ヲ、莫ハ存ニ順逆ヲ。師云、現前ノエ用ヲ。代、眼入ノ看。師云、莫レ存ニ順逆ニヲ。代、手在ハ執捉、足ニ在ハ運奔ス。師云、執捉シ運奔シ羊ヲ。代、兩手ヲユウク伸テ只皈ル。師云、老僧——裏ヲ。代、座ノ坐シタト會ガナケレバ、坐シ走ス。

このような聞書抄(仮名抄)及び本参(仮名抄)に対して、漢文抄が存在する。山梨県永昌院蔵の『龍石山開山大和尚下語・二代代語』は、上冊を欠く零本であるが、表題に見るように代語による拈提の抄である。

六十六。挙、岩頭問レ僧、什麼ノ処来ル。抄云、岩頭ノ意旨如何。代、西天令 巖。

取句、馬蹄入ニ誰家ニカ。

僧云、西京ヨリ来ス。抄云、答話ノ意旨如何。代、藏テ身ヲ露レ影ヲ。

頭云、黄巢過テ後、還テ収ニ得劔ニ麼。抄云、岩頭ノ意旨如何。代、回轉鎗頭、法不ニ相饒ニ。

僧云、収得。抄云、収得的如何。代、回ニ轉ス鎗頭ヲ。

岩頭引レ頸近前ノ云、因。抄云、因時作麼生。代、老僧罪禍。

僧云、師ノ頭落^ヌ也。意旨如何。代、劈面ニ便打^ン。

岩頭呵々大笑、意旨如何。代、劔^ハ為^レ不平^ノ離^レ宝匣^ヲ。

僧後到雪峰。々問、什麼^ノ処来^ル。僧云、岩頭ヨリ来。峰^ノ云、有^ニ何^ノ言句^一。僧拳^レ前話^ヲ。

雪峰打三十棒^ノ劔^ヲ出^ス。拶云、畢竟如何。代、利劔不^レ如^レ錐。

投子問^テ塩平^ノ僧^ニ云、黄巢過後、収^ニ得^レ劔^ヲ麼。僧以^レ手指^レ地^ヲ。拶云、指^レ地^ヲ時如何。代、倚^レ天照雪。取句、遍地是刀鎗。

時有^レ僧云、行路何^ノ行路難。拶云、不^レ移^ニ寸步^ヲ時如何。答^テ云、有^レ氣死人。拶云、不^ニ這般^ノ事^一、何^ソ不^レ言、吹毛本不^レ動^セ。

投子云、三十季弄^レ馬騎、今日却^テ被^ニ驢子^ニ撲^セ。拶云、投子ノ意旨如何。代、有^レ功有^レ賞^{コト}。

本書は、本則の一文毎に「拶語」「代語」更には「取句」が付せられている。このような代語による漢文抄は、特に中世曹洞宗における五位参究の泰斗とも言える傑堂能勝・南英謙宗において盛んであったように思われる。南英謙宗の編著とされる『顯訣耕雲注種月撫撫藁』をはじめ、「骨董證道歌」、「根脚七道語訣」、「傳法偈下語」等は、「下語」「代語」による漢文抄である。室町時代において資料的に裏付け得る「代語」「下語」による漢文抄は、特定の公案集『碧巖録』『無門関』、あるいは「人天眼目」等の語録に対する抄も存在するが、ある種の機関や話頭を綱目毎に掲げ、それに下語、代語を付する体裁のもの、即ち漢文による本参の性格を有するものも多く見られる。中でも注目すべきは、石川力山氏によって紹介された円応寺藏『山雲海月圖』(表題「未語尽情」)である。本書は、峨山韶頌に擬せられるものであり、その識語によれば、享徳二年(一四五三)三月三日の書写本を、文明十一年(一四七九)に再写したものであることがわかる。『山雲海月圖』四、五は、その五の冒頭に「古則話頭之批判并先徳下語共記」とあるように、機関・古則公案に対する下語集であり、漢文による本参と言えらるものである。『山雲海月圖』四の項目を掲げれば、以下

の通りである。

(1) 三種一色之下語 (2) 三玄之下語 (3) 四喝之下語 (4) 四賓主之下語 (5) 四料簡之下語 (6) 三路之下語 (7) 雪山三段 (8) 楊岐八棒之下語 (9) 回互不回互出功首尾相応之下語 (10) 一句一機之下語 (11) 向去却来下語 (12) 浮山九帶之下語 (13) 宏智頌、明峰峨山兩和尚下語并批判 (14) 洞谷瑩山和尚弘廿四則之御語 又、『山雲海月圖』には、別本が存する。石屋派金岡用兼開山の阿波(徳島県)の丈六寺藏本がそれである。丈六寺藏本では更に増補されており、話頭の項目は以下のようになる。

(1) 三種一色下語 (2) 三位下語 (3) 三玄下語 (4) 四喝下語 (5) 四賓主 (6) 四料簡 (7) 三路 (8) 出生不出世 (9) 宏智四借 (10) 八圈妙語下語 (11) 六圈図下語 (12) 雪山三段 (13) 八要玄機 (14) 宏智四圈圖 (15) 四位下語 (16) 楊岐八棒下語 (17) 回互不回互出功首尾相應下語 (18) 一句一機下語 (19) 向去却来宗門大事 (20) 浮山九帶下語 (21) 宏智八句頌 (22) 石霜七去 (23) 洞谷開山心佛二十四則下語

甲斐(山梨県)永昌院の開祖である一華文英(一二四五〜一五〇九)の下語集とされる。永昌院藏『龍谷山開山大和尚語』では、更に話頭の項目類も大幅に増加しており、『人天眼目』の「宗門雜録」の大部分の項目をとりこんでおり、「山雲海月圖・四」とも重複する部分も多い。今、「三種一色」の項を比較すれば、以下の通りである。

(A) 『円応寺藏本』

三種一色之下語

大功之一色 一句子當叶照家、中家難弁。迢々空劫不得収。深固幽遠無人能到。青山父、那邊也、向上也。

(B) 『永昌院藏』龍谷山大和尚下語』

三一色

如何是大功一色。代、一道寒光威音外。漆桶黒光生。文彩未痕初息難傳際。仏祖未生空劫外、正偏不落有無機。夜雨簾外主、不落偏正方。殷勤昨夜三更雨。取、渾然藏理裏、朕兆卒難明。天曉不露、夜半正明。馬投黒馬。黒漆崑崙夜裡走。

正前之一色 一句子當明隱照。諸法實相。實際理地、不受一塵。芦花明月不似他。白雲子、自己也、功也。

正位前一色。代、鷺倚雪巢翹。純清絶点。雪夜見明月。三世諸佛、口掛壁上。月在銀波跳。取、鷺鷥雪裡眠。白鷺下田千点雪。鶴鷺並頭踏雪睡。明月芦花不似他。兩岸芦花映白鷺。

今時之一色 一句子當明全照。糞掃堆頭ウツタカシ丈六金身。現成之公案。當面蹉過。陰々堂々。不墮今時機。森羅万象古佛家風、目前作用也。

総一色ツツ位トヒ用ウルハ、一ト云意之故也。一字ハ主也。主ハ先ツ正位之主也。正シキ一也。此主之一機轉ノ通スル間タ、至処爲主、立処皆真也ト云也。通スル時之主ハ、不正位之主。

今時一色。代、一切色像現明鏡。父母所生眼、悉見三千界。眼見黃葉落、耳聞孤雁鳴。萬像森羅同一印。全身遍界露堂々。胡來胡現、漢來漢現。百花春至為誰開。柳綠花紅。取、南山燒炭北山紅。何處春山花不紅。桃紅李白薔薇紫。山花開似錦、澗水湛如藍。

この他にも、例えば石屋派下には竹居正猷の『幻寄集』（丈六寺藏）があり、又傑堂派下南英謙宗の弟子瑚海仲珊（文明元年（一四六九）示寂）には、『七夜話』（六地藏寺藏）⁸）があるが、これらは同様に古則公案に対する下語集である。現在のところ聞書抄として成立年代が確定しているもの多くは文明年間を上限とするものであり、かつ代語・下語を中心とする漢文抄もその年代をやや遡及し得る程度である。十五世紀後半から十六世紀前半にかけては、多くの語録抄、特に聞書抄（仮名抄）が抄出されたが、十六世紀後半から十七世紀前半にかけては、門参（代語と仮名抄と合糅した形、及び仮名抄のみのもの）、代語（上堂語・小参に代わる叢林行事に即した古則の拈提）が多く制作される傾向にあるように思われる。

〔語録抄〕から「本参」へと言う洞門抄物における歴史的移行過程については、今後調査研究を続けることによつて検証してみたいと考えている。私は別稿において、『天童小参抄』『疎山根脚語訣』『大陽明安大師十八般妙語』等の

語録抄と本参とが存在することを指摘したことがある。⁹⁾

次節においては、佐賀県円応寺に所蔵されている本参資料を軸に、石屋派の本参のあり様を考察したいと思う。¹⁰⁾

二 下語から本参へ

漢文の下語による注釈という形式は、室町時代の比較的早い時期から存在したと思われるが、入室参禅を主とする公案禅の性格がより濃厚になる応仁・文明の乱以降、それ以前には『天童小参録』『自得慧暉録』『劫外録』等、曹洞宗に属する典籍に対する注釈の語録抄が多く抄出されるといふ傾向があつたのに対して、曹洞宗とは直接関係のない典籍、特に公案集である『碧巖録』『無門関』や綱要書『人天眼目』等が多く抄出されるようになってくる。¹¹⁾

前述の『山雲海月圖』を所蔵する円応寺には、他にも多くの代語・本参資料を含む洞門抄物を有するが、漢文の下語による形式から和文を介在して公案を拈提する典型的な本参の形式へという変遷の過程が読みとれるように思う。

本参の後世における典型的な形態を有する資料としては、円応寺に蔵されている、華嶽手沢本の『参禅』と、『百則始終勘破了』¹²⁾（以下『百則』）とが挙げられる。先ず『参禅』の内容であるが、百則の公案の拈提と、更に切紙と内容が共通する参を含む二十六則が付加されている。先に述べた『山雲海月圖四』にみえる『楊岐八種棒』の公案が取りあげられているので、以下に掲げたい。

楊岐八棒之下語 洞門少開

問云、眼光落地時如何。殺棒 大死底人如何作主宰。活棒

如何是即心即佛。過棒 出頭天外時如何。看棒

展開兩手時如何。與棒 拈起主丈子時如何。奪棒

如何是機先一句。因棒 如何是声前一句。放下棒

棒者主人公之名也。八種棒之外、唾子喫苦瓜時如何。秘密之一棒。

（山雲海月圖 四）

楊岐八種棒。師云、眼光落地時殺棒ヲ。代、放身ス。師云、ナントテ。代、放身ノ徑チ、殺棒デ走。師云、句ヲ。代、一死更不再活。○第二、大死底ノ時ノ活棒ヲ。代、良久ス。師云、ナントテ。代、抽身ス。師云、子細ニ。代、丁々ト打ツ処テ、打驚テ走。○第三、即心即佛ノ時過棒ヲ。代、即心即佛トミタ時、棒ヲ下ハ、過テ走。師云、棒ニ當着ヲ。代、柳ハ緑花ハ紅ト、物々ニ碎テ走。○第四、天外出頭ノ時、看棒。代、拂袖ノ飯ル。師云、看棒ヲ。代、関鎖ヲ丁々ト打破ル処テ、関鎖ナケレハ、天外出頭テ走。○兩手展開ノ時、与棒ヲ。代、仕レ手テ走。師云、与棒ヲ。代、開ケ手バ、古今平地テ走。師云、ナントテ与棒テハアルソ。代、若シ爰テ棒ヲ下サハ、何ニガ平地デハサウラウソ。師云、句ヲ。代、獨掌浪ニ不レ鳴。○第六、招主丈時奪棒ヲ。代、良久ス。師云、其幾ヲ。代、乾坤只一人デ走。師云、奪棒ヲ。代、何ント点々左右シタモ、此一人ノ作略トミタ時、棒ヲ奪テ走。○第七、機前棒時用棒ヲ。代、丁々ト打。師云、用棒ヲ。代、何ント点々左右ヌモ物々ニ相逢ガ、用棒デ走。師云、畢竟ヲ。代、機前一句時、何ントシタト拳セハ、七尺八尺千里万里デ走。○第八、秘密ノ棒時、唾子喫ニ苦爪ヲ。師云、秘密棒ヲ。代、良久ス。師云、唾子喫ニ苦爪ヲ。代、混沌未分ノ処テ走。師云、ソノ時ドコエ棒ヲ下メソ。代、漁人・山翁ノ上デ下ノ走。師云、ナントテ秘密ノ棒トハ云タソ。代、丁々ト打タ棒頭ニ始終ハ走ヌ。第九、声前一句ノ時、放下棒ヲ。代、学閉口ス。師云、（後欠）

（「参禅」）

本書は、室町時代後期から江戸時代前半にかけて盛んに抄出せられた本参に共通の性格を有している。一つには、先に述べたとおり、切紙と内容を共通にする参が、古則話頭の拈提と同様に扱われていることが挙げられる。因みに切紙の参のみを扱った本参の資料としては、龍泰寺蔵の『佛家一大事夜話』が挙げられる。後に掲げる常光寺（愛知県渥美町）蔵「潔堂派参話目錄」にも、幾つかの切紙と共通する参が含まれているが、そこにも見える「十三佛参」を

以下に掲げる。

十三佛参。師云、一七日不動、請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、意識情塵ヲ縛殺ノ走。師云、時如何シ。代、ツトト切テ走。師云、送リ羊ヲ。代、本空ニ迷テ走。○二七日釈迦、請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、四十九年ノ説モ入走又。師云、何者ガ聞タソ。代、虚空ガ聞テ走。師云、送リヤウヲ。代、久遠実城ニ送テ走。○三七日文殊、請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、文殊、大智モ入り走又。師云、ナントテ。代、自然智・無師智テ走。師云、送リ羊ヲ。代、智慧仏界ニイサナウテ走。○四七日普賢、請取羊ヲ。代、息切断ノ境、普賢ノ境ニ付テ走。師云、境ハ()。代、息切断ノ境イカ、普賢ノ境テ走。師云、證拠ヲ。代、尽大地白象騎テ走。師云、子細。代、尽大地普賢ノ境ト見タ時、別ニ呈スノハ走又。○五七日地藏、請取羊ヲ。代、最初ノ焰ヲ卒度サマノ走。師云、サマシ羊ヲ。代、虚空韻々トノ錫杖ヲト迄テ走。師云、宝珠ヲ持ノ機ヲ。代、不老ノ妙薬テ走。師云、服シ羊ヲ。代、息切断ノ境イ、服ノ走。六七日弥勒ノ請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、弥勒世界ニ越テ走。師云、弥勒ニ相見シ羊ヲ。代、見時不レ見暗昏々。○七七日薬師、請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、不老ノ妙薬ヲ服得ノ走。師云、不老ノ妙薬ヲ。代、大地無第二人。師云、十二神ノ十二時ヲ守ヤウヲ。代、夫レノ上テ守テ走。師云、守護シ羊ヲ。代、柳ヲ見花ヲ見ルモ、其人ノ脚底テ走。○百个日観音、請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、補陀落世界ニ至テ走。師云、相見。代、見當位聞當位。師云、現シ羊ヲ。代、処々是観音。○一周忌、勢至ノ請取羊ヲ。代、月光ノ至ラヌ処エヤラシメテ走。師云、ヤラシメ羊ヲ。代、良久ス。師云、ナントテ。代、牛頭安ニ尾上ニ、豈ニ借シ太陽ノ氣ヲ。○第三年。師云、阿弥陀ノ請取羊ヲ。代、息切断ノ境イ、四十八願モ尽テ走。師云、ナントテ。代、阿吽斗リテ走。師云、句ヲ。代、岩松無意風来吟。○七年忌。師云、阿閼ノ請取ヤウヲ。代、サテモ殊勝ナヲコエカナ。師云、ナントテ。代、合掌ノ云、アラトウトヤノ佛ヤ。師云、子細。代、拂袖ヲ去。○十三年。師云、大日ノ請取羊ヲ。代、虚空ガ此ノ靈光デサエテ走。師云、其靈光ヲ。代、暗中有レ妙、々中有レ暗。師云、金剛界・胎藏界ヲ。代、陰陽和合テ走。師云、和合シ羊ヲ。代、柳ハ緑花

ハ紅テ走。○三十三年。師云、虚空藏、請取羊ヲ。代、空々ノ會ヲ不レ作、會モ亦會ノ機ヲ作シ走ヌ。師云、夫ハナントテ。代、良久ス。師云、句ヲ。代、総在此中圓。師云、三十三年ノ回向シ羊ヲ。代、何ヲ云モ畢竟跡テ走。師云、虚空藏安心ヲ。代、蛙鳴雀噪モ別テハ走ヌ。師云、時如何。代、ヤラスズシヤ。師云、子細。代、一点梅花藥、三千利界香。

第二には、代語が漢文の一句という下語の形式に拘泥しなくなつてきていることが挙げられる。この点は『百則』において、より明らかに見て取ることが出来、摺語・代語を含まない則が多く見られる。

○剋賓國王、師子尊者斬頸ヲ。云、斬タル幾ヲ云ヘ。云、因縁デ宗。是ハヨスル処ノ一致ト見要処也。縁ニヨルトワ、其意也。又云、七日ニ、王ノ臂自墮テ、白乳ワク「数尺、是ワキツタルシルシ也。家ノ大事不可見、罷参十則之内也。又不識上ニモ可見。全不工不計ト可見ナリ。

○打地和尚棒。是ハ、此ニ一星亥モナイト可見。此時竈ノ下ニ、タカウスル柴ヲタカイテ、ナヘノ内ニ入タル機ワ、一星亥モナイト可見。是ワ、轉処ニ可見也。

○馬祖一禅師、藏頭白海頭黒。機是幻住ト可見也。殊ニ一人頭ハ白、一人頭ハ黒クト云カ、肝要也。畢竟話會ニワ、ヲトスマシイ也。拈花ト可見。本則ヲヨク可見。

又『百則』において、所謂〈代語〉〈代語抄〉が、叢林行事や節氣毎に上堂語や小参に代わつて代語がなされるといふ性格をも合わせ持っている。

南泉示衆云、我十八上ニ、便會作話活計、ト云ハ、マツ十八ヲ定ム也。六根・六識・六境界カ、十八上ナリ。三六ガ十八上、此上デノ活計ト云ハ、一生自由三昧也。アルヲ、趙州聞乃云、我十八上ニ、便會ニ破家散宅ヲ、ト云ハ、サカモト口ヲ打テ出ル也。是モ主我ホウタイナル「ソ。タ「ヲドルマイソ。コウ云ヘハ、轉処ニ可見。畢竟活計ト云ヲキラウ也。十八上ヲ活計トモテハ、ソコガ栖家ニナルソ。故ニ破宅ス也。

今朝九月九日、年々皆賞_レ節。抄云、爲什麼不_レ道十_マ、而賞_三九_一。代云、上_レ到_レ須弥_ニ猶_有天_ノ在_リ。馳_レ書不_レ到_レ家、頭上宝花冠。又、澄源潭水、猶棹_三弧舟_一。又、一重山後一重山。イツレモマダ上_ガ有_ルト云心也。何トテナレバ、洞下ニハ、語十成_ヲイム也。十分ナレバ、必欠ル程ニ、須弥頂上ニ天ガ在也。文ヲツカワスニ、家ニト_ハカ子ハ、曲ナシ。是モサキヲ置也。頭上コソ、人ノ頂キナレ共、花冠ヲキレバ、是モ上在。澄源力水ノ本源ナレ共、舟ニ棹サセバ、猶モヨクアリ。何モ_口ヲ犯ヌカ、我家ノ向上也。

以下の一連の参は、ある年の除夜・元旦・冬夜になされた代語とその注釈であり、「代語抄」と何ら選ぶところがないうように思われる。

除夜云、旧歳已尽、新歳未到、不涉二途時、如何是劫外_レ聲香。代云、確_生花_ヲ分_外奇。コノ心ハ、新旧不涉時節、コノ劫外ヨ。確_生花_ヲ、陽氣_ヲ不_レ受開程ニ、奇也。石上已抽_ツ千尺ノ笋、鉄樹花開劫外ノ春。又、鉄牛夜半_ニ咲_呵々。何モ同意ナリ。

文正啓祚、万物咸新。如何是啓祚_底夏。代云、山門与且門増榮、法輪与食輪常轉。コレヲ、年頭ノ_口ト也トハ、是也。兩輪点スル時、カケタル夏_ヲ、アルマシキ也。

冬夜云、今夜群陰剥尽、明朝一陽来覆。抄云、不涉陰陽、諸人作麼生道。代、因。コレハ、因_地ニトツテミル口傳アリ。

円応寺には、《代語》の資料としては、『円応中興了然大和尚法語』（近世初期写本）が所蔵されている。本書は、「法話」と題されているが、円応寺開山了然永超（一四七一〜一五五一）の、永正十六年（一一五一九）から享祿元年（一一五二八）に至る代語集であり、関東を中心に展開した了庵派下の各派において盛んに行なわれた《代語》のスタイルと共通するものである。石屋派の代語としては竹居正猷『幻奇集』（丈六寺蔵）、金岡用兼の『慈雲開山金岡和尚代語』（同寺蔵）等がある。

三 下語から代語へ

前節において、仮名抄の本参が十六世紀後半以降主流となっていくと、漢文抄の本参が全く途絶えてしまったわけではない。やはり円応寺蔵の『大菴和尚下語』¹⁶では、先の「山雲海月圖 四」に掲げられていた「宏智頌、明峯・峨山兩和尚下語并批判」が漢文抄と仮名抄とで各々別々に拈提されているのであり、いわばその過渡的様相を示しているように思われる。本書は、円応寺二世勝山禅殊(一五六五示寂)の筆写本である。大菴和尚とは大菴須益(一一四〇六〜一四七三)のことと思われる。本書には、太源派下の入室参禅の様子を伝える問答三則も収載されており、その末尾には以下のように記されている。

遠江州天間如和尚批判批判、梅山和尚於處而傳證。時応永廿四年霜月吉日、臨濟宗能大拙弟子、後梅山傳法、橘谷山大洞庵居住天間和尚。

石屋派と太源派下の關係を示唆するものと言え、中世における曹洞宗各派の交流關係を考える上で興味を持たれる。

円応寺所蔵の抄物には、峨山に擬せられものとしては前述の『山雲海月圖』の他に『自得暉録抄』¹⁷があり、『大菴和尚下語』においても峨山韶碩、明峰素哲の下語とされるものが引用されている。特に峨山に擬せられる抄物が幾つか知られており、室町時代初期の洞門抄物を考える上で、その位置づけは重要な課題であると思う。円応寺蔵の他の本参『靈機宏聖道三位之次第』にも引用される、「宏智八句」を以下にとりあげてみたい。

A 漢文抄

B 仮名抄

- 一段光明亘古今。峯云、見聞覚知是道。山云、道離見聞覚智也。拈云、一段光明者、言人々具足底物也。亘古今者、言在凡夫喚作凡夫法、在聖人喚作「聖人法」、久遠逢飯喫飯也。今ノ我等モ如此自由自在、渠カ三昧也。一觀レ彼、如レ至今日、此物三昧也。生ル時共ニ生シ、死時共ニ死ス。段ノ光明トハ、人々ノ摩尼珠也。古トハ久遠、今トハ今
- 一段光明亘古今。峯云、見聞覚知是道。山云、道離見聞覚智也。拈云、一段光明者、言人々具足底物也。亘古今者、言在凡夫喚作凡夫法、在聖人喚作「聖人法」、久遠逢飯喫飯也。今ノ我等モ如此自由自在、渠カ三昧也。一觀レ彼、如レ至今日、此物三昧也。生ル時共ニ生シ、死時共ニ死ス。段ノ光明トハ、人々ノ摩尼珠也。古トハ久遠、今トハ今

死、故云、亘古今。見聞覺智^(イマ)是道、見ル時、此物三昧也。道離^ニ見聞覺智^一言時、頭々ノ上ノ物々ノ上ニ不レ留也。

○有無照破脱情塵。云、實際理地、不受一塵。山云、瑠璃殿上無智識。乾坤大地百雜碎、大死底ノ所ニ至テ有無照破^{ト云}。拈云、有無者、言一段光明也。有ル時ハ成レ有ト、々ル時ハ成レ無ト。照破者、言也。脱情塵者、言大死底ノ上機ニ不レ被^レ翻回^一、大死底一句ト云也。言脱情塵、情塵共言也。此一句三世諸佛、歷代祖師開^レ口不得、故智不到処ト云、自己心照渊源モ言也。

○當頭觸着弥天罪。云、青天尚喫棒。山云、一亦莫守。拈云、是至人劔刃上求人言也。瑠璃殿上至言也。十分清白言、當頭処、觸着弥天罪言、當頭ヲ打破、自己不留故、觸着弥天罪言也。

日也。此故、觀彼久遠、猶如今日也。

○有無照破脱情塵。峯云、實際理地、不受一塵。山云、瑠璃殿上無智識。一段ノ光明ト云ハ、有ト云モ無ト云モ、此一段ノ大光明也。有無照破ト云ハ、乾坤大地百雜碎ノ、大死底ノ處ニ至ルヲ云也。脱^ニ情塵^ヲ云ハ、大死底ノ上ニ機ヲヒルカヘシ、不^レラ回^レ頭^ヲ、大死底ノ一句ノ脱^ニ情塵^ヲ脱スト云。此一句ハ、三世ノ諸仏、歷代ノ祖師モ開^レ口不得。此ヲ知不到ノ処、自己真照ノ渊源ノ処也。

○當頭觸着弥天罪。峯云、青天猶喫棒。山云、一亦莫守。此ヲ劔刃上ニ覺人ト云也。十分清白當頭也。觸着弥天ノ罪トハ、自己ニ留マラセシカ為也。此故、弥天ノ罪ト云也。又云、當トハ、物々ニアタル故也。頭トハ、物々頭々也。觸トハ、佛ノ性モ、衆生ノ性モ、草木ノ性モ、佛性ナレハ、觸ト云也。着トハ、一切ニ賓主アルカ故、又弥天トハ、未^レ覺^ラ自^ラ心ノ為ト思ウ心アルカ故、弥天ノ罪ト云也。此罪ハ、尋常ノ罪ニアラス、更^ニ可^レ落地獄モナシ、其ライカニト云ハ、草木ニ心皈レハ、其ノ性何處ニカ落在ス。如是見レハ、我性モ亦如是。

○退步承一新。峯云、相逢不疑。山云、瑠璃殿上撲倒分碎始親者也。拈云、退步承當言、自己尽、撲倒分碎、本位至轉処路也。是末後一會言也。特地新言、達磨未來、佛未出世処至也。本位言是也。旧時行李人、本位物ト二人不可有。拈云、紫極言、佛劍法劍極故言也。宮中鳥抱卵言、混沌未分田地、夫上當不正當處、天地未分、黑白未分処也。鳥言ハ、極本位処也。抱卵言、本位有本位不雜、抱卵言也。

○紫極宮中鳥抱卵。言ハ、主中主、亦玄中玄、亦玄具、亦妙中妙、亦鷺鷥立雪非同色、言是也。言雪、言紫極宮中鳥也。鷺鷥・紫極也。亦同中同、亦異中異、是言也。暗中明、々中暗、言主中主也。明言、暗不交主也。那邊也。

○退步承當特地新。峯云、相逢不疑。山云、到瑠璃殿上、撲倒粉碎始親。自己知不到ノ處ヲフミ去テ、出意叶ヲ始テ親ト云也。退步承當トハ、轉処ノ路也。承當トハ、旧時行履ノ人ニ相見スルヲ云也。特地新ト云ハ、達磨不來東土、二祖不往西天ノ本意ト云ハ、是也。旧時行履ノ人トハ、本意ノ物全ク無也。又云、退トハ、一切ノ妄ヲ退ク物也。此性ハ、万事不退ニシテ、一切ノ妄ニコモレリ。故ニ退ト云也。歩ト云ハ、物々ノ歩ニ不レ即シテ轉スル也。心若不レ轉、只妄性ナルヘシ。轉スル故ニ退歩ト云也。一切ニ不レ轉、以レ何為レ眼。承當ト云ハ、轉處實ナルカ故ニ、特地新ナリト云ハ、宗旨ノ轉スル処也。カノ地ハ、天地ノ天ニハアラス、此地ハ心ノ境界、無位ノ田地也。是ヲ宗旨ノ轉処ト云ナリ。新ナリト云ハ、格外ノ處ナル故也。

○紫極宮中鳥抱卵。峯云、暗中明。山云、白雲依旧青山中。紫極宮ト云ハ、佛見法見ヲ極ル故ニ、紫極ト云也。鳥抱卵ト云ハ、混沌未分ノ田地、黑白未分ノ田地ヲ、鳥ト云、極位ノ処也。紫極宮ノ裏ニ鳥抱卵ト云ハ、主中ノ主、玄中ノ玄、妙中ノ妙也。鷺鷥立雪非同色ト云モ、是也。立

白雪云ハ、紫極ノ鳥也、鷲也、紫極也。又ハ、同中ノ同、
 異中ノ異ト、是ヲ云也。暗中ノ明、暗中ト云ハ、主也。明
 ト云ハ、暗ニ不_レ交主也。那边也。又云、紫極ト云ハ、宗
 旨ノ在処也。土曠人稀ナル処也。紫極ト云ハ、陰ニモ不
 属、陽ニモ不_レ属故ニ、紫極ト云也。拶_レ手ヲ空空トノ無_レ大
 千モ、虚空ヲ打ハ、ヒキアリ。此聲ヲ耳ニトメテ、手ヲ
 拶スルニ一物ナシ。是元来無一物不轉身ノ処也。故ニ紫極
 ト云也。是ヲ那边ト云ハ、佛祖左右ニヨキル道路也。通
 処トハ、古佛ノ道_陽也。宮トハ、渠カ居処也。如何ナ
 レハ、宮トハ云フ。宮トハ、無位ノ都也。サレハ、渠ハ、
 天子ノ位也。中トハ、正天子也。正天子マシマスト云心也。
 サレハ、中ヲアタルト讀也。鳥ト云ハ、暗ノ兒也。雖_レ然
 性アリ、彼ノ性異類ニ轉ス。卵ト云ハ、明ノ位也。明トハ、
 一切ノ黑白ヲ分カ故ニ、是卵生ナリトイヘトモ、一回轉ノ
 黑白ノ主トナレハ、殊更黑白ニ通ス。黑白通ル故ニ、通処
 全無ニ也。卵ヲ養育スル心也。此故ニ抱ト云也。明暗無ニ
 也。黑白モ亦無ニ也。然_レ、迷悟ニ同キ也。是則心ノ一法
 也。此世界ニ弥淪ノ那边トハナル也。

○銀河波底推兔輪。云、明中暗。云、青山依旧白雲中也。枯云、銀河浪裏言、紫極宮中ノ処也。兔ト言ハ、主中主也。兔推輪言ハ、自レ本位一機轉ル処、推ト言也。轉テ未諸法ノ相ニ不居也。轉未知不到云処ニ也。故一色邊、亦當頭ト是ヲ言。銀河波底兔推輪言、屋裏轉処、亦那邊轉言、明中暗言、轉主也。故此時明中暗言也。

○銀河波底推兔輪。峯云、明中暗。山云、青山依旧白雲中。銀河波底トハ、紫極宮ト同衰也。兔トハ、主中主也。推輪トハ、本意ヨリ今時ニ一機轉スル処ヲ、推ト云也。轉ストイヘトモ、未混ニ諸法ノ相ニ、未後ノ當頭トモ云也。屋裡ノ轉処トモ云也。明中ノ暗ト云ハ、轉スレハ、主トナル故ニ、明中ノ暗トモ云也。又云、銀河波底兔推輪ト云ハ、銀河トハ、明也、トイハン為也。銀モ白シ、河モ白シ、波モ白シ。兔ト云ハ、月ト云ン為也。月モ白シ。サレトモ、コトテハ、兔ハ、明中ノ暗ト云ン為也。銀河トハ、天河ノ衰也。牽牛、織女ヲ恋テ心ヲ通ハセトモ、此天河渡不_レ得ホトニ、織女ニ逢コトナシ。此河ヲワタレハ、織ヲル女ニ逢也。此河ト云ハ、衆生自己ノ靈水也。波トハ、衆生ノ心念也。彼兔_(マユ)兔ハ、主人公ナリ。如何トナレハ、兔ハ不姪ノ子ヲ生ス。月ヲ父トシ、露ヲ母トス。兔ニハ、父母ハアレトモ、父母ハナシ。サレハ、天然ノ位也。渠カ兒也。兔ハ、万葉ノ中ニアツテ、露霜ヲ吸也。故万葉草ノ主ト云也。兔トハ、月ヲイワン為也。故心月弧圓、光含ニ万象ヲ。此月世界ニ弥淪ス。是兔推ト輪云也。過去ヨリ現在ニ出現シ、現在ヨリ未來ニサラン。事更ニ余人不_レ疑、此ヲ推輪ト云也。事ハ、全自由ニ無ニ蹤跡。是則衆生、見ニモ不疑也。サレハ、這辺トハ、凡夫見落在スル処ナリ。

○是須——用。云、逢飯喫飯、逢茶喫茶。山云、出遊三昧門。拈云、是須携手言、自本位轉出来、諸法相居、偏正曾不離、本位不疑處主也。妙手言也。出来言也。用可言、向百草頭上祖師意見處也。

○百億——身。云、百億声色は何ト云フ。周遍十方心、不在一切處。百億一身言ハ、頭々上現、至此物ノ三昧也。身言ハ、百億声色は何ト見時、声色語言中ニ相合テ、此中ニ不留故、は何ト言ハ身也。天上天下唯我独尊言也。一段光明亘古今、百億一身、能見ニ不可有、凡夫二句可見也。

○是須妙手携来用。峯云、逢茶喫茶、逢飯喫飯。山云、入徹幽玄底、出遊三昧門。妙手携来テ用ト云ハ、本意ヨリ(一)轉来、混ニ諸法相ニ故、偏正曾不離ニ本意ヲ不疑口主也。是ヲ妙手ト云也。是ヲ携来ト云也。来テ可レ用ト云ハ、百草頭上ニ向テ、祖師ノ意ヲ見也。又云、是須妙手携来用、是トハ、久遠也。是非ノ是ニアラス、渠力姿也。カレニ主アリ。此ヲ妙手ト云。須ト云、那辺ノ兒也。彼在所ニテ手ヲ天外ニヲヨホシテ、何物ヲ手裡ニ取来ル。カノ手裡ニ陽在陰在、陰ヲ左トシ、陽ヲ右トス。陰陽ヲ左右ニ握テ、手ヲ開ハ、天地ニ陰陽モ分也。此ヲ携来ト云也。本分ノ性也。来トハ、陰陽分テ後、衆生草木悉皆成仏スル也。是ニ携来ト云也。可用云ハ、物々色々々々ニ不疑ヲ云ナリ。

○百億分身處(々)眞。峯云、百億ノ聲色は何ソ。山云、周遍十方心、不在一切處。百億分身處、眞ト云ハ、頭々物々上ニ至マテ、此物ノ三昧也。百億聲色は何ソト見時、声色言語中ニ有テ不留故也。何ソト云足下ハ、明真也。天上天下唯我独尊トモ云。一段光明亘古今、百億分身處々眞ト能々可見。不可有不審云々。又云、百トハ、一ヲ以

テ母トシ、百ヲ以テ法トス。法ハ、物々ニ極テ明也。一
 ヨリ万法ニ出タリ。此方法ハ、一ニ極テヲサマル也。故ニ
 此ヲ百ト云。億トハ、三界ノ中、所在ノ性アリ。彼性ハ、
 如微塵刹土。此故百千劫ヲツムトモ、彼ノ性数ヲ明ニ不
 覺。故ニ、無計ト云心也。分トハ、一切ノ性不分、今時ニ
 去トイヘトモ、其ノ性ハ、終一ヨリ出タリ。サレハ、性
 ニナシ。雖然、性ハマチク也。身ト物々ノ体也。体ニ
 無居住、誰カ一物トノ性ニアツカラサラン。此故ニモ涅槃
 ヲハ、跋提河ノ側ニ涅槃ヲ唱了玉フ。処々トハ、佛祖衆生
 「〔 〕草木天地在所マチク也。サレハ、彼ノ物トモ
 ノ立所別々ナル故ニ、処ト云也。青キ物元來變ノ不黃。
 其性ニナシ。金五色ニシテ、其心不變。故ニ真ト云也。真
 トハ、マノアタリト云也。雖ニ眞実ト生死不定ナルカ如シ。
 全其真ト云ハ、生死モナク、無變易、増減モナシ。雖ニ然、
 衆生迷カ故、増減アリト思フ。是ヒトヘニ迷ウ故也。是
 ヲ俱ニサトルヲ、處々真ト云ナリ。

四 本参の目録の成立

中世における曹洞宗道元派下における公案禅の援用は、各派の本参の目録が作成されるほどに、体系化されてくる。既にこの点についても石川力山氏の論稿があるが、管見の本参目録の中で最も成立が早いものとしては、常光寺（愛知県渥美町）藏の「傑堂派参話目録」が挙げられる。²⁰ 常光寺は、寒巖派下の普濟寺十三門派の一つ潔堂派の寺院であり、まとまった切紙資料としては最も古い部類に属する、文明年間から天文年間に至る二十一通の切紙を所蔵していることで知られている。（※各則の番号は、筆者が付す。）

廣澤派流儀曇和尚末孫²¹取傳、儀俊是傳受畢。潔堂一派之参和目録次第、他門不出。其家嗣法者一人可許。是者儀俊細蜜修業在故、他山無別諸派下者也。云云。可秘々々。

- (1) 露柱話 (2) 香巖樹上 (3) 趙州無 (4) 雲門須弥山 (5) 目前真之大道 (6) 摩頂之参 (7) 南泉斬猫
- (8) 飯錢之話 (9) 取詩書 (10) 六外之話 (11) 不思議 (12) 蒲團上一句 (13) 滿字之大事 (14) 没后作僧
- 話 (15) 一辺消災咒 (16) 金剛之正体 (17) 四相之話 (18) 一心之参話 (19) 離性之参 (20) 無位真人 (21) 首
- 山竹篋 (22) 勃陀勃地 (23) 摩頂之話 (24) 一中十位 (25) 碧岩総頌 (26) 五位之起 (27) 独達之劔 (28) 回向
- 之参 (29) 焼香之参 (30) 念誦之参 (31) 靈供之参 (32) 一葉舟中 (33) 無師自覚参 (34) 又手之参 (35) 六祖
- 傳衣 (36) 宗門之是非 (37) 大悟之参 (38) 投機之参 (39) 傳受之参 (40) 相承之参 (41) 印可之参 (42) 自家
- 之参 (43) 大事之参

今四十三則傳受前々々、此分之目録、嗣法之者、渡参和可在。

- (44) 頂門之眼 (45) 空劫之落居 (46) 血脉之参 (47) 眼中之三身 (48) 智之参 (49) 正法眼藏 (50) 曹山孤峰
- 不白 (51) 死活當頭 (52) 見桃花悟道 (53) 露柱之一句 (54) 中之参 (55) 空劫已前之眼 (56) 清白傳家 (57)
- 芦花之雪 (58) 趙州和尚無 (59) 百丈野狐 (60) 俱胝一指 (61) 胡人無鬚之話 (62) 香巖樹上話 (63) 趙州洗鉢

孟 (64) 奚仲造車 (65) 大通智勝佛 (66) 清稅孤貧 (67) 二庵主拳頭 (68) 瑞岩主人公 (69) 托鉢下堂 (70) 南泉斬猫 (71) 洞山三頓棒 (72) 鏡清七條 (73) 国師三喚 (74) 洞山麻三斤 (75) 平常心是道 (76) 大力量人 (77) 雲門乾屎橛 (78) 不思善惡 (79) 三座說法 (80) 一僧捲簾 (81) 紙燭吹滅 (82) 六祖風幡 (83) 即心即佛 (84) 趙州勘破 (85) 外道問佛 (86) 南泉智不是道 (87) 清女離魂 (88) 路逢達道人 (89) 栢樹子之話 (90) 牛過窓櫺 (91) 雲門話墮 (92) 淨瓶躍倒 (93) 達磨安心 (94) 首山竹篋 (95) 阿誰之話 (96) 百尺之竿頭 (97) 兜率之三関 (98) 乾峰一路 (99) 大通智勝佛 (100) 迦葉刹竿 (101) 六十棒 (102) 不思善惡 (103) 宏智四借 (104) 本源自性参 (105) 三地獄之話 (106) 格外一句 (107) 五弟勞之話 (108) 永平大佛 (109) 曹山佛前掃地 (110) 烏臼二上座 (111) 投子大同禪師 (112) 岩頭橫走 (113) 換骨之脱躰 (114) 黃龍三関 (115) 三身之譚訛 (116) 位裡之心 (117) 玄沙出家眼 (118) 空劫已前自己 (119) 雨打石頭無人処 (120) 天上天下唯我独尊 (121) 一色眼之話 (122) 雲門三句 (123) 雪積霜凍 (124) 世尊先鬼后鬼 (125) 点凡入聖参 (126) 十三仏之話 (127) 地水火風空話

合八十四則、是モ傳受前ニ、數日經、嗣法者可參和、先々此話罷参者ニ可傳受可在。可秘々々。

○傳後参自是在

(128) 枯木竜吟 (129) 井駟之話 (130) 得失之話 (131) 知不知之話 (132) 首山竹篋 (133) 清女離魂 (134) 樹上之話 (135) 竿頭進步話 (136) 吸尽去也 (137) 阿誰之話 (138) 牛窓櫺 (139) 法眼窓之話 (140) 劍刃上 (141) 德山托鉢話 (142) 達道人話 (143) 大死底之話 (144) 外道問仏 (145) 三機輪之話 (146) 二祖安心 (147) 混沌未分話 (148) 清稅孤貧 (149) 即心即佛 (150) 麻三斤 (151) 栢樹子話 (152) 船舷未跨棒 (153) 虚空五字之話 (154) 有句無句 (155) 女子出定 (156) 拈華話 (157) 野狐之話 (158) 向去却來話 (159) 別山相見 (160) 孤子峰不白 (161) 不識上一句 合三十四則、是傳后之参也。

天童如淨和尚、此目錄義尹和尚附与也。可秘々々。天童三十四話卜目錄ニ乗スル。

又一説目錄傳后ノ参在リ。

(162) 心身脱落 (163) 万機休罷 (164) 正法眼蔵 (165) 世尊拈華 (166) 青原鋤斧子 (167) 死蛇大路 (168) 堅固法身
 (169) 趙州省鉢孟 (170) 瑞岩主人公 (171) 無位真人 (172) 洛浦無心道人 (173) 趙州無 (174) 南泉斬猫 (175) 馬祖
 即心即佛 (176) 黄檗六十棒 (177) 攄酒糟漢 (178) 十八上之活計 (179) 曹山孤峰不白 (180) 雲門話墮 (181) 祖意
 教意 (182) 倩女離魂

合三十一則。目錄ニ独則ト上ル傳后之参也。

(183) 初入頭之参 (184) 廿五位之話 (185) 洞山悟本五位 (186) 五位之総頌 (187) 七堂之参 (188) 前八句后八句 (189)
 石霜之七去 (190) 夜参七去合。

合八則。

(191) 碧岩百則 (192) 九十七則去之圓相 (193) 十八般之妙語

其家相承了、傳后之参共皆罷参シテ、此透リノ参和可在。末後之参也。嗣法者一人可許総目錄。如是顯此、目錄。
 嗣法雖、為未熟者、不可見。可秘々々。三拜九拜。

竜天護法善神守護所、血脉不断旨、至祝々々。

廣澤派流脉潔堂和尚之目錄也。

維時嘉吉三癸亥季十月廿二日、於普濟禪寺之方丈、曇和尚今附授義俊畢。

于時文明十三辛丑八月一日、於普濟禪寺之丈室、俊和尚今附授光忠畢。義俊 (花押)

于時明應三年甲寅拾二月念廿日、於普濟禪寺之丈室、忠和尚令附授是秀畢。光忠 (花押)

于時天文三甲午季二月十八日、於普濟禪寺之丈室、是秀令附授俊德畢。是秀 (花押)

皆時永祿元戊午年仲秋廿八日、於普濟禪寺丈室、俊德附授源察畢。俊德 (花押)

于時天正四丙子三月朔日、於常光寺真前、源察令附授祥君畢。源察（花押）

皆時慶長拾庚戌年林鐘朔日、於常光寺真前、祥君令附授芳久畢。祥君（花押）

維時元和辛酉季仲春廿八日、於丈室、芳久今附授天察畢。芳久（花押）

上記の資料によって、少なくとも寒巖派下では、文明年間に既に各派毎の本参の体系化、いわば入室参禅のカリキュラム化がなされたと言える。又、公案の体系化と共に、考察しなければならぬのは、夜参の成立とその体系化の問題であるが、この点については、今後の課題としたい。

通説としては、道元派下の公案禅の本格的援用については、瑩山紹瑾や峨山韶碩の頃より始まったとされるが、未だ確実な文献的裏付けがなされているわけではない。上来、峨山に擬せられる幾つかの抄物を取りあげたが、そこには後世の本参に取り込まれている則も存し、又同様に寂円派に伝承されたとされる『永平寺三十四話本参』（「南谷老師三十四問」）なども存することから、後代の本参への変遷過程を明らかにするためにも、これらの資料の歴史的位置づけは早急になされなければならない。

このような意味から、最後に瑩山に擬せられる『秘密正法眼藏』の公案が、やがて本参として成立してゆく、その過渡的過程にあると思われる、円応寺藏『十則正法眼并抄』の抄参部分を紹介してみたい。

- 一、世尊拈^ス一枝、迦葉微笑^ス。世尊云、吾^ニ有^ニ正法眼藏、涅槃妙心、實相無相、微笑法門——付^ニ囑^ス摩訶迦葉
- 一。抄云、付囑底道理作麼生。代云、折^レ梅向^ニ驛使^一、寄^レ与^レ樓頭人^ニ。又抄云、喚甚麼為^ニ正法眼——法門ト。展
- ニ開兩手^ツ云、十个指頭八个穴。註云、折^レ梅向^ニ驛使^一寄——人トハ、人ノ秘藏スル梅^ノ花^ヲ折^テ、所^レケンダン人^ニ向
- テ、アマリニ迷惑シテ、フツト云ヤウハ、此花ヲバ樓頭人ニマイラセンガタメナリ。樓頭人トハ、其國ノ主人也。
- 此ノ心ハ、世尊^キ迦葉^ニ囑セウスト、カネテ不^レ得^ハ——□ヲフツト主眼^ヲ具シタ人ニタクミ不^レ斗付与シタマデヨ。
- 又了庵派、十个指頭八个穴□ハ、用也。八个穴ナラ、正法眼藏、涅槃——法門ト、穴ハ□ヲカズヘアワスル也。

真□□正法眼——門ヨ。是レハ、花ニモ用処ナシ、拈ノ処ニ用処アリト用也。拈ノ処トハ、手中ノ□□□、無門ノ批判、懸ニ羊頭ニ賣ニ狗肉ヲ、ト云心ハ、花ニ用処ハナイソ。拈ノ処ヲ能ク見ヨ、ト云心也。羊頭ヨリ下ヲヨク見ヨ。下ガ大夏也。大夏ノミハケ夏ソ、ト云ハ、拈ノ手中ヲ好ク見ヨト云心也。八个ノ穴ノ処ヲ見ヨ也。此ノ話ニワ、從レ始メ一々參得多キ也。口傳心授多也。更參ヨ三十季、唯佛与仏ノ——□也。只ノ人不知不見也。當門派ニモ□イ到レテ此話ニ多キ也。畢竟無師知ノ処ヲ取也。根莖枝葉因果同時ノ処、肝要也。

二、迦葉刹竿。拶云、呼喚ハ且置、迦葉云、門前刹竿倒却着セヨト道意旨如何。代云、美言滯レ心首ニ、常作ニ縁盧場ト。注云、刹竿ハ、說法ニタツルモノ也。ホトニ、阿難ハ四十九季、教内ニトマル也。ホトニ、迦葉ハ、ソノ多智多解ラステヨト示ス也。教外別傳、不立文字ノ処ハ、智解ノナキ処也。智解ハ、皆教内也。代ノ心モ同心也。法眼ノ語也。又瞎驢ハ不レ逢靈山ノ機、扶起ス吾宗ノ大法幢ト、了庵派ハ、句ヲ付ル也。

三、聖諦第一義。拶云、如何是真俗不二、聖諦第一義。代云、虚玄大道、無□□宗。又拶云、磨云、廓然無聖。帝云、對朕者誰。磨云、不識。代云、大通智勝佛十劫——不得成佛道。宣又虚玄大道トハ、教外極妙窮源ノ処也。是又無着ノ真宗也。此句、人天眼目ノ着語也。廓然無聖ノ処、誰不識ノ処ハ、大通智勝佛ノ上ニテ、全扁可レ見合。大通智勝佛上テ、仏法ノ現スルト云□□テ也。不得成佛道也。武帝ノ對朕ニスルモノハ誰ソト不レ知ルガ（ ）ト達磨不識ノ見夏也。瑩山批判ニ云、三世諸佛ノ瞻望不レ及、歷代祖師ノ傳授不レ得。對朕ニ者ハ誰ノ。好ノ消息還見麼ヤ。為レ什麼不識ナル。現成公案、山不レ可レ知ニ是レ山ト、水不レ可レ知ニ是水ト、更無レ入処、柳ハ緑花ハ紅、不會大難可、老胡ノ知不レ及処也。若及ノ処ナラハ、聖凡有レ間斷、不識ノ処聖凡無二、佛祖不會、□□無間斷、意識不レ及境界、心王不動ノ地也。是則不識上一句也。世尊密語、廓然無聖也。迦葉不履藏、現成公案也。計較不レ及処也。内外一如也。峨山先師、旭日ノ入レ壁照レ書ヲ得レ其旨ヲ示ル。達磨不會大難曰、不識ノ処也。又於レ此話ニ參得多シ。了庵派ニハ、誰不識ノ主中主ニ用也。又白井門派ニハ、笑テ入レ芳塵ニ爛漫□用也。云心ハ、此ノ君子ノ□□ノ公子ヲチトウチマジワリ

テ遊^ノハ、イツレガ本ノ主ヤラウ、マ^ハク、ヘダテナシ。ホドニ、誰不識^ノ用也。又予師^ト金岡^ノ参得^ハ、對朕者誰^ソ。□武帝^ノキト、達磨^ノ不識^ノ用別也。更参セヨ。

四、青原行思、僧問、不落階級何^ノ所^ノ務^ヌ。師云、聖諦亦不為、答話意旨如何。代云、虚空無^レ内外、心法亦如^レ斯。注云、心空^ノ性^ニ何^ノヘタテガソウズカ、不落^レ階級^ニ理也。聖[□]（^ハ）空性也。如^ニ幻翁^ノ批判^ニ、本来無^レ名相^ハ、聖^ハ（^ハ）在^ニ此中^ニ。任運^ハ（^ハ）、古今無^レ間斷。此時空中^ニ何^ニモ坐セスト云コトナシ。又古今^ニ無^レ間空^ノ用処ナリ。鑿^レ山和尚云、衲被蒙頭坐冷暖——只自知。此^ノ時^ハ高上ナリ、只イウマテ也。此時何^ノ階級ガアルヘキノ。是カ、聖諦也。何^ヲモ不^レ為^レ行李也。又投子青頌、無^レ見^ニ頂露^一雲急^ク、劫外^ノ靈枝不^レ帶^レ春^ヲ。那边不^レ坐^ニ空王殿^ニ、争^カ肯^キ耘^テ田^ニ向^レ日輪^ニ。是^ハ、此^ノ主^ハ那边^ニ不^レ坐[、]又何^カ日輪天子^ノ位^ニ不^レ坐[、]ドコホドデカアルラント、不^レ犯^ノ（^ハ）也。了庵派如^レ斯用[□]。吾宗那边^ト透過^ク、有^ニ出身路^ニ処也。石屋派^ニテハ、不^レ（^ハ）漢地^ハ（^ハ）、苒心^ニ用也。此時不^レ落^ニ階級^一入也。聖諦又不^レ為^レ人ナリ。

五、洞山悟本大師問雲岩、無情說法何人^カ得^レ听^ヲ。岩云、無情听得。山云、某甲^シ為^レ什麼不^レ聞。岩堅^ニ起^テ拂子^ヲ云、還聞麼^ヤ。山有^レ省、乃云、也太奇々々々、無情說法不思議。若將^レ耳听^ハ声^ヲ不^レ現、眼処^ニ聞^レ声^ヲ方^ニ得^レ知^ヲ。此^ノ心^ハ、無情^ノ説トハ、不説ナリ。不説ナレハ、不^レ聞也。是^カ真^ノ般若ナリ。代云、吾亦不聞、汝又無説。無聞無説真^ノ般若。コレハ、須菩提坐^ニ岩谷^ニ、帝釈天花^ヲ乱墮^{スル}ナリ。須菩提一向^ニ只坐シタル処^ハ、真^ノ説ナリト、帝釈^ヲ、カズルナリ。亦如^ニ幻翁^ノ批判^ニ云、無情說法、有情聞底道理^ハ、寒来^ハ衣重^テ自^ラ禦^レ寒^ヲ、熱来^ハ弄扇子^ヲ自^ラ除^レ暑^ヲ。更^ニ有^ニ軌則^一麼也。曰心^ハ、寒^カ人^ニ衣^ヲカササセウト不^レ思、熱^カ扇子^ヲ弄サセウト不^レ思、サリナガラ、寒^カ来^レハ衣^ヲ重^テ、熱^カ扇子^ヲツカウハ、無性説^ヲ、有性^ノ人^カウケタ^ハ（^ハ）。代云、風送^レ漁舟^ニ便到^レ岸、雨催^ニ樵子^ヲ令^レ飯^レ家。是^モ、風^モ雨^モ漁人^ノ山翁^ヲ送^ラウトハ、不送也。又了庵派^ニハ、虚空說法何^ノ用^レ口、森羅万象^ノ尽^レ說法。大悟^シ用^ハ、千聖無^レ解會^ト、大悟^一也。

六、白馬儒禪師問僧、語黙動靜、総是総不是作麼生。僧無語。師乃打。代僧ニ作麼生□。代云、適来猶記得。此心ハ、ハヤサキニ云ツルワ、ト云心也。尽ッハライタテル処デ、()マツシロニ云タナリ。此僧ノ無對ノ見衷ナリ。瑩山判云、無對ノ処、知レ法者ノ懼、還()子ニ、末后ノ一棒、功不浪施者。取句、趙婆吸酢。又、縦滄海變終為()。香嚴樹上ノ話ノ類則也。又、放身捨命正此時ト、了庵派ニ用也。

七、倩女離魂。那个是真底。傳燈抄云、王藻倩曰、張鑿女有柔婉、母語テ王寅ニ曰、我女嫁汝及長。父鑿不許。王寅憤然入京。乃柔振レ名一代。一日舟行□()也。□□汝是誰也。鑿女也。曾□□今遂其□。寅喜テ其美入レ蜀生二子。□□將二子到鑿。々驚曰、我女□□它、其魂□□、故倩女離魂。如幻翁云、此話全扁宏智八句相當ル也。百億分身処々真也。瑩山云、一切智々清淨無二、々々分無別無斷故。又云、御影道レ真、如何下語。一僧云、分明紙上張公子、尽力高声喚下レ鷹。五祖栽松道者ノ機用ヲ青原密語ノ云、影揺千尺竜蛇動、声撼半尺ヲ風雨寒。又、判云、影見、竜全非レ竜ニ、又、見レ蛇又非レ蛇ニ、只松影耳。其作レ風ヲ聞ハ全非レ風、作レ雨亦非レ雨。只松声耳。()若()五祖亦虛也。五祖亦真也。摛云、倩女離魂、那个カ是真底。代、()如照像。又、水銀無瑕、阿魏無真。コレハ、假カ真ト用也。代心モ、影ニ有形也。又、鏡ハ、分身ノ用処ナリ。又、疎影橫斜水清瀟。梅花ハ、月ノ夜ニ水ニ印シタル影ヲ見衷也。是モ□□真ト用也。又紙上張公子モ、昼分明ニ見テ喚タル心ハ、假カ真也。御影ヲ真前ト云キ、此心也。又兩手展開ノ云、左右逢源。了庵派ニ兩手展開ハ空ノ用処、兩手共空也。ホトニ、左右逢源也。

八、徳山托鉢下堂シタル心ハ、ナニ心モナク、フツト行キタケレハ、出テタマテ也。アルヲ、雪峰、此老漢、鐘未レ鳴鼓未レニ響、托鉢何カ去ト云タル心、声色以前ノ口カト云キナリ。山低頭シテ飯方丈ハ、飯タケレハ、飯タマデ也。岩頭ノ此老漢不レ會末后句ヲト云心ハ、アマリ何莫モナイホトニ、様アリサウニ云也。又密啓モ只耳ニモノヲ云様ニシテ飯也。明□ 陸堂シテ云、ヨノツ子ノ莫、ヲナシカラス。此老漢會末后句ヲト云キ、様アリサウニ、云イナシタマデ也。三季活ヲ得タリト云キ、ハタシテ三季シテ死シタルハ、云イアワセタマデヨ。徳山托鉢シテ下レ堂与飯方丈、有

諸訛麼。代云、心々不_レ觸_レ物ニ、歩々不_レ涉_レ縁ニ。雪峰、此老漢——何処去_レ道意旨如何。代云、天桃窓下背花眠_ル。又、世界混然未發時_キ。又睡中消息太分明。岩頭云、此老漢不_レ會末后句_ヲ。又密啓_ス其意。又、會末后句、岩頭意旨如何。代云、明眼衲僧皆_ス賺_ス不_レ賺_ス拳_モ、又不_レ相_レ弥_ニ。德山ノ機ハスエマテ同者也。岩頭ノ機者、末マデヤウガマシケンニ云テ、人ヲタブラカス也。雪峰ノ声色已前ニヲク也。三人ノ手ダテ別々也。ハタシテハ、同シ者也。又大源門徒於_ニ岱藏主ノ會_下カニ參得_リ。師云、末后句_ヲ不_レ會_ト云タルキヲ云ヘ。鼓未鳴鐘未——下堂スル、密啓_ノ処ト云ハ、同シ用也。無門頌ニ、末后与最初是不_レ此_ノ句ニ、若是末后ナラハ、岩頭・徳山共ニ未_レ見夢有_シ、ト云タモ、死_ル時節ヲ「——」ル者ハナシト云心也。ホドニコソ、宗旨末后トハ、同シ死底ノ処ナレトモ、行李_ニ到_リ、只死ナウズマデヨ、ト云ハ、高上也。「——」最初トハ、別也。頌ニヨクアウ也。コレガ、宗旨ノ末后ナリ。最初末后トハ、大死底一句ヲ云ヘ云ヘト示ス処ナリ。

九、仰山惠寂禪師、因僧問、法身還解說法也無也。師云、我不_レ得_レ說_ヲ、別_ニ有人說得_{タリ}。僧云、說得底人何在。仰山推出_レ枕子_ヲ。為山聞得云、寂子用_ニ劍刃上ノ夏_ヲ。瑩山云、我亦推出_レ蒲團_ヲ。急_ト坐スル正當_ハ、無念無相也。慕此コガ、好_ク何_ヲモキル処ナリ。コレハ、自己法身_ヲ答ナリ。此ノ時_ヲ、ヤブリハ也。又枕_ヲ案_ニテ極睡_ニ到_ル処_ヲ、法身也。慕極睡_ノ時、何也。蒲團_ヲ急_ト坐スレ、正當_ハ、無念無相也。慕_コガ、好_クナリ。又、枕_ヲ案_ニテ極睡_ニ到_ル処_ヲ、法身也。慕極睡_ノ時、何_ニモナイソ。ホトニ、劍刃上也。代、因_ヲ。又頭落又不知。又法身_ノ說法トハ、無說也。無語_ノ処_カ、最初呈スル無分也。

十、夾山會因僧問、如何是道。山云、大陽溢目、万里不掛片雲_ヲ。僧云、学人不_レ會。師云、清淨水魚自迷。僧禮拜。瑩山云、歴々不昧、処々現成。又清淨水魚自迷_ハ、自_レ是似_レ騎_レ牛_ノ覓_レ牛。注云、答話心_ハ、拶_ニ開眼_ヲ云、虚空無内外、心法亦如_レ斯。又内外虚玄、徹底空寂。是_レハ、目前真大道_ヲ答_ルナリ。アルヲ、此僧_ヲ、見ワツスホドニ、魚ノ水_ニ迷_ガ如_レ空中_ニ坐_{シテ}、空中_ヲ看_テシラヌ_ゾ、ト云心也。代、目前真大道、不見_レ纖毫也_{大奇}。

瑾上坐右伏以举^二古德機縁^一十則了也。一々透得。

第一、拈花話、三世諸佛一大夏因縁也。第二、門前利竿話、一切祖師發名之榜樣也。第三、不識話、佛祖不傳不授之如也。第四、聖諦亦不為^レ話、歷代祖師能行到所。第五、無情說法之話、五祖明心悟道初也。第六、六外一句話、天下衲僧吞吐不得底也。第七、倩女離魂話、諸佛諸祖勇猛精進力也。第八、德山托鉢話、古人放行任運作略也。第九、枕子之話、古德不^レ得^レ犯^レ鋒銚^ヲ傷^レ手^ヲ底^ノ手段也。第十、道不會話、古德垂^レ手救^レ弊底^ノ樣子也。学人須^ク欲^ヘ成^ニ大善知識^一、先^ツ参^ス此^ノ十則^ノ大夏^ヲ。若^シ参^テ不得^ラ、未^ダ許^レ称^ニ吾^カ兒孫^ト。實哉斯^ノ言^ヲ、可秘々々。於能州洞谷山永光禪寺丈室五十四瑩山比丘紹瑾書之。

『十則正法眼并抄』は、前半が所詮謂『秘密正法眼藏』であり続いて上掲の「十則正法眼抄」が続く構成である。本抄には、「又予師金岡^{ヨカ}参得[、]對朕者誰^ソ」とあることから、あるいは抄者は金岡用兼の弟子章山昺嬰に比定し得るかもしれない。又、通幻寂靈、瑩山紹瑾、峨山韶碩の語の引用が見える外に、「當門派（石屋派）」の解釈に対して、「了庵派」「白井門徒（双林寺派）」の解釈が引き合いに出されている点などが注目される。

さて、語録抄から代語・本参へ、更に代語・本参から切紙へという、洞門抄物における変遷の枠組みを提示したのは、石川力山氏であった。又、円応寺所蔵の禅籍抄物に一早く注目し、紹介を行ったのも石川氏である。私は、円応寺所蔵の抄物を資料として、本参の成立過程について若干の考察をしようとしたが、問題点のほとんどが既に石川氏によって指摘されていることに、いささか愕然とする次第である。しかしながら、その枠組みや資料の歴史的位位置けについては批判的検討を続けていきたいと思う。

（この稿未完）

〔註〕

- ①拙稿「大徳寺派系密参録について(一)―『雲門録百則』を中心にして―」(『宗学研究』三六号)
 同右「大徳寺派系密参録について(二)―『臨濟録』の密参録を中心として―」(『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』二七号)
 同右「大徳寺派系密参録について(三)―『碧巖録龍獄和尚秘辨』を中心にして―」(『曹洞宗研究員研究紀要』二五号)
 同右「大徳寺派系密参録について(四)―『碧岩類則密参録』を中心にして―」(『宗学研究』三七号)
 同右「大徳寺派系密参録について(五)―『百則密参録』を中心にして―」(『駒澤大学大学院仏教学研究会年報』二八号)
 同右「足利学校遺蹟図書館蔵の禅籍について」(『禅文化研究所紀要』二二一号)
- ②石川力山「洞門抄物の発生とその性格」(『松ヶ岡文庫研究年報』二二号)
 ③石川力山「人天眼目抄」について」(『印度学仏教学研究』二六卷二号)
 ④拙稿「大東急記念文庫蔵『人天眼目批卻集』について」(『駒澤大学仏教学部論集』二七号)
 同右「中世曹洞宗における『人天眼目』の受容について」(『曹洞宗研究員研究紀要』二八号)
- ⑤拙稿「叡山文庫蔵『碧巖休岱記』について」(『宗学研究』三九号)
 ⑥金田弘「叡山文庫と禅籍抄物」(『国学院雑誌』八二卷五号)
 ⑦石川力山「円応寺所蔵の『山雲海月圖』について」(『曹洞宗研究員研究生研究紀要』一一号)
 ⑧椎名宏雄「六地藏寺所蔵禅籍目錄及び解題」(『書誌学』新二六・二七号)
 ⑨拙稿「禅籍抄物研究(一)」(『曹洞宗宗学研究所紀要』一一号)
- ⑩石川力山「肥前円応寺所蔵の門参資料」(『印度学仏教学研究』二九卷二号)。円応寺所蔵の本参資料としては、『大菴和尚下語』(勝山禅殊筆写、一叟勝鈍の慶長四年の識語あり)、『閑語不見』(勝山筆写、天叢殊久から勝鈍に附与された旨の、元和五年の識語あり)、『靈機宏聖道三位之次第』(禅殊書写力、後欠)、『二十七通句』(仮題、勝巖宗殊筆写、華嶽宗藝手沢本)等がある。
- ⑪注②石川論文参照。
- ⑫表紙に「圓應室中置之。華岳(花押)／参禅」とあり、奥書等はなく七世朝翁殊叡の弟子八世華嶽宗藝筆による江戸時代初期の写本と推定される。

⑬表紙に「百則始終勘破了」とあり、奥書に「天正三乙亥白仲春下澣於瑞阜精舍書之畢 殊久謹合爪」とあり、その後別書で、「前惣持妙音三世天叢和尚附勝純、今寄附圓應、以為後代龜鏡者也。皆元和己未黃梅吉日」とある。これによれば、妙音寺三世の天叢殊久が天正三年（一五七五）に書写したものを円応寺六世一叟勝純に附与して、元和五年（一六一九）に円応寺に蔵されることとなったと思われる。天叢殊久の書写本としては、他に「靈機宏聖道三位之次第」（永祿三年（一五六〇）写）がある。

⑭石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論（二）——龍泰寺所蔵「仏家一大事夜話」について——」

⑮同右「円応中興了然大和尚法語」について、「宗学研究」二二〇号。外に「秘傳集」（勝山禅殊筆写、前半が代語、後半は代語抄。前欠）が存する。

⑯同右「肥前円応寺所蔵「大菴和尚法語」について」（「宗学研究」二二二号）。奥書に「圓應室中笈箱裏置焉。勝山和尚手跡、向後莫／分失、請取可相授也矣。／慶長四年戊戌孟春廿二日 一叟勝純」とある。

⑰同右「峨山和尚誦抄「自得暉録」について」（「宗教学論集」第九輯）

同右「靈空淨慈自得暉禪師語録抄」についての研究（二）」（「駒澤大学仏教学部論集」二八号）

⑱註④⑨の拙稿参照。「一華開五葉」（内題「峨山和尚人天眼之代」茨城県六地藏寺蔵）及び「小参之抄（総持二代和尚之下語）」（長野県大安寺蔵、静岡県最福寺蔵）について、翻刻と簡単な紹介を行った。

⑲石川力山「中世曹洞宗切紙の分類試論（五）——叢林行事關係を中心として（続）——」（「駒澤大学仏教学部研究紀要」四三号）

⑳拙稿「深堂派切紙に関する一試論——常光寺資料を中心にして——」（「駒澤大学禅研究所年報」七号）

㉑拙稿「深堂派所伝の切紙について——常光寺蔵切紙の紹介——」（「駒澤大学大学院仏教学研究會年報」二九号）

㉒石川論文参照。

安藤嘉則「曹洞三位の研究（一）」（「駒澤女子大学研究紀要」三号）

㉓「永平寺三十四話本参」は、永平寺所蔵本及び龍沢寺所蔵本があり、「南谷老師三十四問」は駒澤大学図書館所蔵本がある。

㉔石川力山「秘密正法眼蔵」について、「宗学研究」二〇号）

同右「秘密正法眼蔵」再考」（「宗学研究」二二一号）

㉕石川力山「美濃国龍泰寺所蔵の門参資料について（上）（中）（下）」（「駒澤大学仏教学部研究紀要」三七〜三九号）

上記論文において、石川氏は「十則正法眼蔵」について分析をなされ、又円応寺所蔵本についても言及されている。又この他に快庵派門参の大安寺蔵「本来面目」にも「十則正法眼」が所載されている。

【関係法系図】(傍線筆者)

